

## 第 20 回高島賞受賞によせて



吉田 早悠里  
名古屋大学高等研究院

このたび、日本ナイル・エチオピア学会第 20 回高島賞を受賞し、身に余る光栄に感謝しております。今日まで、多くの先生方、諸先輩方、研究仲間に多方面にわたって助言、時には叱咤激励をいただきました。また、エチオピアでは現地の方々に支えていただきました。今回の受賞は、日ごろからの皆様のご支援あってのことと身に沁みて感じています。ここに深い感謝の意を示したいと存じます。

私は、2004 年からエチオピア南西部カファ地方に暮らすマンジヨを対象とした研究を行ってきました。受賞の対象として審査していただいた論文は、マンジヨが政府に対して実施した請願活動と、政府の対応を明らかにし、民族自決を掲げる現在のエチオピアにおいて民族とはみなされないマイノリティに対する取り組みの問題点を検討したものです。ここでは、今回の受賞に至るまでの研究の歩みと、現在の研究内容について綴ってみたいと思います。

2002 年 8 月、私は初めてエチオピアの大地を踏みました。当時、南山大学の学部 3 年生だった私は、石原美奈子先生が担当するフィールドワークの授業の受講生でした。夏休みにヨーロッパを旅する予定を立てていた私に、石原先生は「あなたもエチオピアへ一緒に行かない？」とお声をかけてくださいました。そして私は、約 20 日間、石原先生の調査に同行させていただくことになりました。エチオピアでは、見るもの、接するものすべてが刺激的で、これを機に大学院への進学を決意しました。

大学院に入学した当初、私はコーヒー発祥の地とされるカファ地方でコーヒーを栽培する農耕民と世界経済の関係についての研究に取り組もうと考えていました。すると、故福井勝義先生が「カファ地方であれば、マンジヨでしょう」とおっしゃいました。突然、私のもとにあらわれたマンジヨという人々。当時、カファ地方に暮らすマンジヨに関する最新の情報源は、エチオピアにおける職能集団や狩猟集団の現状を描き出した論文集『周縁の人々 (Peripheral People: The Excluded Minorities of Ethiopia)』に収められたゲザヘン (Gezahegn) による 7 ページほどの記述のみでした。ゲザヘンによると、マンジヨはかつて狩猟を主な生業とし、現在も、共住するマジョリティの農耕民カファから日常生活のさまざまな側面において排除され、周縁化されているとのことでした。なぜマンジヨはカファから排除され、周縁化されているのか。カファとマンジヨの関係に関心を抱いた私は、マンジヨを研究対象とすることにしました。

2005 年 1 月、私は初めてカファ地方を訪ねました。カファ地方の役場で調査協力を依頼すると、カファ地方長官はマンジヨがカファから差別を受けていることを簡単に説明してくれました。折しも、NGO がカファによるマンジヨへの差別を除去するための取り組みに着手するところだといいます。そこで私は、



NGO が活動を実施する地区のひとつであるビタ郡のウォシエロ村を最初の調査地とすることにしました。

当時、アムハラ語もカファ語も話すことができなかった私は、ウォシエロ村の小学校で教えるカファの教師たちが暮らす住居に滞在することになりました。私がお世話になったカファの人々は、口をそろえてカファとマンジョの違いを語りました。マンジョはイノシン、サル、コロブスのほか、病気や事故で死んだ家畜など、何でも食べることで、マンジョは不衛生であること、このような理由から、

カファはマンジョの家へ立ち入ったり、マンジョと一緒に食事をしたりすることはないと語りました。カファとマンジョの間での結婚は、論外であるといいました。

調査を進めるなかで、ウォシエロ村でカファによる差別に不満を抱いたマンジョが、2002年にカファを殺害する事件を起こしたということを知りました。カファとマンジョの双方から死者が出て、ウォシエロ村と近隣村に暮らす200人以上のマンジョの男性が逮捕されました。この事件について聞き取りを進めていくと、マンジョが1997年から政府に対して、差別の改善と、マンジョを民族として承認するように求める請願活動を実施してきたことも明らかになっていきました。そこで私は、2002年にウォシエロ村で発生した事件に焦点をあて、マンジョがカファによる差別を受けながらも、差別をなくすために自らカファや政府に対して働きかけていることについて論じ、2007年1月に修士論文を提出しました。

2007年4月に博士課程に進学した後、ウォシエロ村での事件の発生要因のひとつとされた、マンジョによる政府に対する請願活動に関して調査をはじめました。同時に、1897年までカファ地方に繁栄したカファ王国がエチオピア帝国に編入されて以降、カファ社会がどのように変化してきたのか、その変化の様相を多角的に明らかにしようと試みました。そのようななかで、現在のカファとマンジョの関係が、かつてのカファ王国時代のカファとマンジョの関係とは異なる様相を帯びたものであることが明確になっていきました。

加えて、カファ地方に継続して通ううちに、私は次第にカファとマンジョの関係を単に差別とみなすことに違和感を覚えるようになっていきました。というのは、日々の生活におけるカファとマンジョの関係には、差別という言葉では説明することができない関係が数多くあったためです。たとえば、それまで露骨にマンジョを罵り、マンジョは良くないと忠告するカファの人物が、マンジョに敬意を払い、さらには称揚するような語りをすることがありました。また、マンジョの母乳を飲んだ子どもは強く育つとされ、マンジョの参加が不可欠とされる儀礼もありました。

カファ地方では、役場や学校に勤務するカファや、村に暮らすカファとマンジョの人々が、両者の関係を差別と説明していました。そして、NGOやキリスト教会が差別改善に向けた取り組みを実施し、政府はマンジョに対するアファーマティブ・アクションを行っていました。しかし、人々の差別の語りは、目の前で繰り返されている日常的なカファとマンジョの関係とは齟齬があるように感じられました。人々の差別に関する語りとは、現実とのギャップをどのように考えるのか。差別にとられることのない、人々の豊かな日常生活を描き出すことはできないか。それが私の研究テーマとなりました。

とはいえ、カファ地方を訪れる以前に読んだゲザヘンの著作では、マンジョがカファから排除され、周縁化されていると著されていました。カファ地方では、村に入る前から、そしてマンジョの人々に実際に会う前から、「マンジョはカファから差別されている」という語りを何度も耳にしました。私はマンジョと会う以前に、既に差別という言葉にとらわれていたのです。

そこで、博士論文では、差別という言葉を中心に、どのような現実が紡ぎ出されているのかを明らかにしようと試みました。着目したのは、近年、差別が人権を脅かす問題として、国家、キリスト教会、NGOなどのさまざまなアクターによる取り組みの対象となっていることです。そして、国家、キリスト教会、NGOなど多様なアクターと、彼らを用いる差別の語彙に注意を払い、カファとマンジョの間での差別がどのように形成されてきたのかを検討しました。そこから、差別改善を目的とした取り組みが実施されることで、支援の対象となる社会に差別、人権、平等の語彙と概念がもたらされ、それらの語彙が対象となる社会に暮らす人々によって翻訳、活用され、結果として差別が強化されていることを明らかにしました。

実際には、カファとマンジョの日常生活においては、常に差別が介在しているわけではありません。それにもかかわらず、差別を分析概念として用いることにより、差別という言葉では説明することができない関係は分析の対象からこぼれ落ちてしまいます。そこで、2012年に博士論文を提出してからは、差別に限定せず、日常生活において人々がどのように他者を差異化し、自らと関係付けているのか、人々の日常のコミュニケーションや相互関係をつぶさに観察・把握し、人々の社会的布置、相互関係、彼らの生活実態を社会全体から包括的に解明しようとしています。

現在はカファ地方での調査を継続しつつ、カファ地方からおよそ10km離れたオロミヤ州ジンマ地方の村落で調査を行っています。その村落には、民族や宗教、出自、出身地の異なる人々や、難病を患った病人、悩みを抱える人々、身寄りのない人々がエチオピア各地から訪れて暮らしています。このような人々が、お互いをどのように受け入れ、共に暮らしているのか。彼らの日々の営みのなかから、差異とは何か、差別とは何かをとらえなおすことができるのではないかと考えています。

エチオピア研究をはじめて10年が経ち、高島賞を受賞したことを、ひとつの節目として、気持ちを新たにして研究に地道に取り組んでいきたいと存じます。今後とも、ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。